
魔法先生リリカルネギま！～光輝の勇者と塔から来た少女～

剣 流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生リリカルネギま！〜光輝の勇者と塔から来た少女〜

【Nコード】

N2339R

【作者名】

剣 流星

【あらすじ】

神谷聖時が中学生になってから三度目の春が来た。聖時はとある理由から、住みなられた海鳴市から遠くはなれた麻帆良学園にピティ、ゆめみ、そして高町なのはの三人と共に来る事になった。そこで彼は、もう一人の英雄の息子で、かつて自分と妹が名付け親になったひとりの少年、ネギと出会う。この物語は、英雄を父に持つ、二人の息子の物語である。

注意・この物語は、現在作者が書いているもう一つの作品「魔法少女リリカルなのは 真の紋章と竜の騎士」の続編に当たる物語で

す。相変わらずの駄文で、一部キャラ崩壊の原作ブレイクが有ります。また、設定の一部はこの作品のオリジナルになっており、ストーリーも一部オリジナルになっています。そう言ったものが嫌いな方は見ないことをお勧めします。不定期連載作品です。使用原作が多いので、ここに表示します。(ドラゴンクエスト・ダイの大冒険 魔法少女リリカルなのはシリーズ るろくに剣心 アルトネリコ2 アルトネリコ3 幻想水滸伝シリーズ Fate・stay n o g h t ゼロの使い魔 IZUMO2 聖闘士聖矢・THE LOST CANVAS冥王神話 魔法先生ネギま! Lの季節2 黒神 ヴァンパイヤ十字界 p i a n e t a r i a n ちいさなほしのゆめ)

プロローグ（前書き）

どうも、作者の剣 流星です。

この作品は、自分がココに作品を投稿するようになって、丸1周年になるのを記念して書いた作品です。

この作品は自分が今連載している「魔法少女リリカルなのは」真の紋章と竜の騎士」の続編に当たる作品です。

今現在、もう一つの作品を優先的に書いているので、こちらの作品は不定期連載になりますのでご了承ください。

プロローグ

プロローグ

数年前の神谷邸。

その縁側に髪の高い女性が座っていた。

その女性は妊婦なのか、大きなお腹していた。

子供の声「アリカお姉ちゃん！」

遠くから同じ顔をした二人の子供が走りながら、縁側に居た女性・
・アリカに声をかけてきた。

アリカ「ん？聖時^{せいじ}と桃華^{とうか}か？どうした二人とも？」

アリカは近寄ってきた双子の兄弟に柔らかい微笑をしながら話しかけた。

桃華「アリカお姉ちゃん！赤ちゃんまだ生まれないの？」

聖時「生まれないの？」

アリカ「まだ予定日には日にちがあるからまだだよ。」

桃華「そっか」

残念そうな顔をする桃華と聖時。

アリカ「そんなに早くは生まれないよ。それよりも、二人ともこの子の名前は考えてきてくれたかな？」

聖時「うん 桃華と一緒に考えたよ・・・でもいいの？僕達が生まれてくる赤ちゃんに名前を付けても？」

アリカ「もちろん・・・ナギや千尋、アルビオレ達に任せたらロクな名前を付けられかねん。」

聖時「ロクな名前？」

アリカ「ああ、ナギはこの子に「男ならトンヌラで決まりだ！」だと抜かすし、千尋は「ゴンザレスで決まりね」とのたまうし、アルビオレは「ゴメスですね」だとほざく！挙句の果てに、ラカンに至っては、「ゲレグレでいいじゃないか？」だと言う！まったく私の息子はどこそこのキラークなパンサーか！！」

聖時「え・・・え」と・・・（汗）」

アリカ「すまん、取り乱した。とにかく、あいつ等に任せたらロクなことになりかねないから、二人にお願いしたいのだ。」

桃華「そ・・・そうだったんだ・・・。（汗）」

アリカ「それで、二人は名前を考えてくれた？」

二人「「うん」」

アリカ「そっか、でどんな名前を考えてくれたのかな？」

アリカの質問に双子は声を揃えてその名前を言おうとタイミングを計ってその名前を言った。

二人「いつせーので！ネギ」

アリカ「ネギ・・・ネギ・スプリングフィールドか・・・いい名前だ。」

桃華「本当？！」

アリカ「ああ、それじゃあ今日からは、そなたの名前はネギだ」

アリカは自分の大きなお腹を撫でながらそう言った。

アリカがそう言うと、桃華はとても良い笑顔になり、アリカのお腹を触りながらこう言った。

桃華「ネギ、早く生まれてきて、お姉ちゃんと一緒に遊ぼうね」

聖時「あっ！僕も僕も！」

そう言つて聖時も桃華のようにアリカのお腹を触りながら言った。

聖時「ネギ、お兄ちゃんだぞ。生まれてきたら僕とも一緒に遊ぼうな」

桃華「あゝ！お兄ちゃん！ネギと遊ぶのは私が先だからね！」

聖時「僕が先だぞ！」

アリカ「こらこら、喧嘩をするな」

二人の喧嘩を優しく仲裁するアリカ。

神谷邸の縁側、そこには柔らかな午後の平和な一時が流れていた。

第1話 麻帆良学園（前書き）

どうも、剣 流星です。

えゝこのお話は、現在作者が書いているもう一つの作品「魔法少女リリカルなのはゝ真の紋章と竜の騎士ゝ」の一年後のお話です。それではどうぞ。

第1話 麻帆良学園

聖時「今ココに誓おう、今は体が遠くに離れていても……」

ふたば「今は、こんなかたち精神体でしか会えなくても……」

サキ「たとえこの先、どんなに辛いことがあっても……」

三人「……いつか必ず、現実で再会をする事を誓おう!!」「」

第1話 麻帆良学園？

麻帆良学園のとある駅前、そこには女の子と思われるような顔立ちをし、亜麻色の長い髪を後ろで束ね、聖遼学園中等部のブレザーの男子の制服に身を包んだ人物が立っていた。

「男装の令嬢」、そんな言葉が当てはまりそうなその人物は、れっきとした男である。

彼はかつて三人で誓い合った約束を思い出しながら、右手につけている花輪を撫でた。

彼の名は神谷聖時。かみやせいじ今日からこの麻幌良学園の中等部に転入する人物である。

聖時は彼女とした約束を思い出しながら目の前に広がる街並みを見ていた。

ピティ「どうしたの？ボーとして。」

聖時の肩に乗っている妖精の様な小さな体の女の子、聖時の使い魔であるピティがボーとした感じで町並みを見ていたので声をかけてきた

聖時「いや・・・なんでもない。それよりも話には聞いてたけど本当に町全体が学園なんだな。」

なのは「そうだよ。ここ麻帆良学園は、この世界でも1、2を争う程の大きさを誇る学園都市なの。ここには複数の大学をはじめ、各種の教育機関が集合しているから、大きくなるのは当たり前なの。」

サイドテールで、スーツ姿の女性、高町なのはが麻帆良学園の事について説明した。

彼女は管理局の魔導師で、聖時達と同じく、今日から1年間この麻帆良学園所属の魔法先生と生徒に教導をするためにココに来た。同じ時期に来ると言う事で、今回一緒にココに来たのである。

ゆめみ「ここに来るのも久しぶりですね聖時さん。」

学園都市を眺めながら人間形態型のロボットヒューマンフォームの少女、ゆめみは聖時にそう言った。

なのは「え？聖時くんもゆめみさんも麻帆良学園ココに来たことあるんですか？」

ゆめみ「ええ、まだ聖時さん達が小さかった頃に。」

聖時「まだ父さん、母さん、桃華が居た時にエヴァ姉やアスナに会いに来ていたんだ。」

ピティ「え？アスナ？誰それ？エヴァの名前は前に聞いたよね？確か聖時のお父さんの義理の妹みたいな人だつて。」

聖時「アスナは父さん達が引き取ろうとした子でね・・・もしかしたら俺の義理の兄妹になつていたかもしれない子なんだ。諸々の事情でそれが出来なくなつただけ、仕送りとか手紙のやり取り、長期休暇の時にはなるべく神谷^{うち}の中の誰かが会いに来てたんだ。」

ピティ「へーそうだったんだ。聖時の兄妹になつてたかもしれない子ね・・・」

聖時「一緒には住んでないけど、エヴァ姉共々、俺は二人を家族だと思つてゐるよ。」

ピティ「そっか・・・いつか二人とも一緒に暮らせるようになれるといいね。」

聖時「ああ。」

聖時はそう言つて返事をした後、『約束』の事を思い出して黙り込んだ。

今はもう完璧な形で成すことが出来ない『約束』・・・だけどその一部でも果たすことができれば・・・
そう聖時は考えこみ、この麻帆良の地に来ていと言つ、『約束』をした少女の一人を思った。

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピティ「聖時？」

聖時「あ、なんでもない。だた、俺が置いてきた別荘の手入れを、才人や猛たちはちゃんと手入れしてくれるかな？と思って。」

ゆめみ「大丈夫でしょう、士郎さんもいますし、それに、聖時さんが居ない間も童虎さんとの修行に別荘を使ってもいい代わりに、掃除等の手入れをちゃんと言つ約束でしたから。」

聖時「そうだね、さて、そろそろ学園長からの迎えの人が来ても頃なんだけど……………」

そう言つて聖時は周りを見あたし、迎えの人が来ているかを確認しながらに散歩前に歩くとフツと足に何かコツンとぶつかる感触を感じ取つた。

聖時「ん？…………これは？」

聖時は足元の感触の元を見つけ、それを拾い上げた。

聖時「ペンダント？しかも2つ？」

聖時が拾い上げたペンダントは2つで、その一つは中央の石の上に三日月の装飾を施した物で、もう一つは雫の形をした不思議な輝きを持つペンダントで、それは…………

聖時「これ…………輝聖石のペンダントだ！」

ピティ達「…………え！？」

ピティ「な・・・なんで輝聖石きせいせきのペンダントがここに?！」

ゆめみ「あれは確か特別な生成方法でしか作れない物で、その作り方を知っているのは今は亡きカール王であるアバンさまの他には、聖時さんのお父様であるマスター・・・聖さまと、その聖さまが残した資料で作り方を知った聖時さんしか居ないはず・・・現存する輝聖石もアバンさまが作った5つの他には、聖さまが桃華とうかさんと聖時さんに作った二つの7個しかないはずです、それがどうて・・・」

聖時はゆめみの話を聞きながら、今自分の首から下げられている、妹の形見の輝聖石のペンダントをいじりながら、ある事を思い出していた。

聖時「まさか、このペンダント・・・小さい時に裏山から別の世界に迷い込んだ時に出会った、あの女の子に渡したままの俺のペンダントじゃないのか?・・・そんなはずないか」

聖時は自分で思いついた可能性をそんな分けなないないと思い、その考えを引っ込めた。

聖時「とにかく、後で学園の関係者に拾ったって言うて渡しておこう。」

ピティ「そうだね。それよりも迎えの人まだかな」

ピティがそんなことを言っていると、遠くから誰かが歩いてこちらに近づいてくるのが見えた。

ゆめみ「あら？あの人がそうじゃないですか？」

ピティ「ん？・・・まさか、それはないんじゃないの？だってどう見たってあの子、小学生ぐらいの子供だよ。」

ゆめみが言った方向、そこには10歳位のメガネをかけた男の子が歩いて此方に向かってきていた。

やがてその男の子は聖時達の前まで歩いてきて立ち止まった。

男の子「神谷さん・・・ですね？」

聖時「あ、うん、そうだけど・・・（あれ？この男の子・・・）」

聖時は自分の目の前に立っている男の子を見て、かつて幼い時に神谷の家に居候していたナギ・スプリングフィールドの面影を見た。

なのは「あの・・・キミは？」

男の子「あ、はい学園長から神谷さん達を案内するよう言われた、ネギ・スプリングフィールドです。」

聖時「スプリングフィールドって、もしかしてナギ兄の？・・・大きくなくなったな！」

聖時は目の前に居るネギの頭に手をやり、撫で始めた。

ネギ「あ・・・あの、僕を知ってるんですか？」

ネギは撫でられる手をくすぐったそうにしながら聖時に聞いた。

聖時「知ってるも何も、俺はネギの名付け親なんだぞ。」

ネギ「え、僕の?! 本当なんですか?!」

聖時「なんだ、高畑さんやネカネさんから聞いてないのか? お前は俺が住んでいた世界、第97管理世界の神谷邸で生まれたんだぞ。」

ネギ「え?! そうなんですか?! じゃあ・・・もしかして父さんとは・・・」

ゆめみ「もちろん知り合いですよ。聖時さんのご両親は、あなたのお父さん・・・ナギさんと同じ赤き翼仲間たったんですよ。」

ネギ「と・・・父さんの仲間だった! じ・・・じゃあタカミチとも・・・」

ゆめみ「はい、もちろん知り合いです。」

ネギ「そうだったんですか、さすがテラ大量消失事件を解決して、第97管理外世界を救った「光輝の勇者」です!」

聖時「光輝の勇者?」

ネギ「はい! 管理局や僕ら魔法使い達の間では、「赤き翼」の「竜帝の聖」の宿していた光輝の紋章を受け継ぎ、第97管理世界を救ったて事で結構有名になってますよ! いや、お会いできて光荣です!」

聖時「あ、ああ・・・此方こそ合えて光荣だよ。」

聖時は自分の話をされてやや驚いたが、次には実の妹の桃華を見るような目で、ネギを撫でながら優しい目で見はじめた。

聖時（本当に・・・大きくなって・・・）

聖時は今、感無量と言った心境だった。

聖時「さてと、自己紹介がまだだったな、もう知っていると思うけど、俺は神谷聖時、これから1年間よろしくな！」

なのは「私は高町なのは、管理局から教導の為に此方に派遣された魔導師です。」

ゆめみ「私はゆめみ、聖時さん達を初めとした、神谷家の人たちに使えるお手伝いの者です。」

ピティ「そして私はピティ、聖時の使い魔をしてるの よろしくね、ネギ」

ネギ「え?! よ・・・妖精?!」

ピティ「やつぱり私の姿は見えるんだね。」

ネギ「え?! 見えるって・・・どう言う事ですか？」

聖時「あ、ピティは特殊な使い魔でね、ある一定の魔力がある人・・・俗に言う、魔法関係者以外には見えないんだ。」

ネギ「あ、そうなんですか。」

聖時「そ！だからこんなにも、堂々とピティを連れて歩く事が出来るんだ。」

ネギ「そうなんですか。」

ネギが不思議そうにピティを見てると、不意に電子音声の音がしてきた。

???『マスター、私の紹介はしていただけないんですか?』

聖時「ん？あ、ごめんごめん。」

ネギ「え？今の声は？」

聖時「あ、コイツからだよ」

そう言つて聖時は自分の左手の指にはめている、エメレルドグリーンの丸い石が褒めこまれている指輪をネギに見せた。

指輪『はじめまして、ネギ・スプリングフィールド殿、私はマスター聖時のデバイス、レイジング・ソードと言います』

ネギ「ゆ・・・指輪がしゃべった?!」

聖時「インテリジェトスデバイスだよ。」

ネギ「インテリジェトスデバイス・・・じゃあ、これが外の世界の管理局が使っているあの・・・」

聖時「ああ、そうだよ。もともと、コイツは管理局が使っているソレとは違って、だいぶじゃじゃ馬なんだけどね」

レイジングソード『じゃじゃ馬とはずいぶん言い方ですね。』

聖時「悪い悪い、さて、話し込んだけど、そろそろ学園長の所に案内してくれるかな？」

ネギ「あ、そうでした！すいません、話し込んだじゃいましたね、それじゃあご案内します。僕に付いて来てください。」

そう言つてネギは、聖時たちを先導しながら歩き始めた。

その背中を見ながら、聖時は今は亡き双子の妹の桃華とうかに心の中で話しかけた。

聖時（桃華、見てるか？俺たちがあの時名前をつけた赤ん坊が、こんなにも大きくなったぞ。）

すると聖時はどこかで、桃華が笑ってくれたような感じを感じ取り、微笑みながら先を歩いているネギを追いかけて歩き始めた。

おまけコーナー in 麻帆良

ピティ「どうも、ピティです。」

カモ「オウ！女の子達のアイドル、オコジョ妖精のカモミールだ！」

ピティ「はあ~~~~、なんであんたが私の相方なの……」

カモ「いいじゃねえか！ まっ、俺に任せれば、このコーナーは安泰だからよ。この俺の漢気おつぎで読者の女の子達はメロメロになるぜ！！」

ピティ「はいはい、寝言は寝てから言いなさい。さてこのネギま！ 編に入ってからのおまけコーナー、そこで、今回はこの編に入ってからが聖時が、どれくらい強くなっているかを紹介するから」

かみやせいじ
神谷聖時

使用デバイス：レイジングソード（エレメンタルデバイス）

光の精霊・レイを宿し、27も真の紋章の一つ、「時空の紋章」が入っている特別なデバイス。聖時の父親である神谷聖かみやひじりが昔使っていたもので、聖が神谷邸の裏山にあるシンダルの遺跡に封印した物。魔界の名工ロン・ベルクの一番弟子であるノヴァが「ダイの剣」を元にして作ったものである。

宿している紋章：真の光輝の紋章

聖遼学園で起きた「意識不明事件」を追っている最中に、宿してしまった紋章。かつては聖時の父親である聖が宿していたが、かつて冬木の地で起きた第四次聖杯戦争の最中に行方不明になった物である。

この紋章は他の真の紋章と一線隔てた力や能力がある。その能力とは次の通りである。

無効の光り：紋章の宿っている手に、あらゆる異能の能力を打ち消

す光りを発生させられる。ただし、その効果は光を纏っている手で直接触らなければ打つ消す事が出来ない。要は「とある」に出てくる幻想殺しと似た様な物である。なお、打ち消した異能の大きさに比例して、使うほどに宿主の寿命を削る。

スキルドレイン

吸収の光：紋章から魔法陣を出して、相手の技能や技等をコピー、吸収し、使えるようにする能力。吸収した能力は紋章に宿り、以後、紋章の能力として使う事が出来る。ただし、吸収する相手が、宿主よりレベルが上な場合、相手を弱らせないと、吸収することは出来ないし、吸収する技能や技が強ければ強いほど、比例するように宿主の寿命を削る。また、吸収した能力は、使う時、オリジナルの使い手より力（魔力や気等）を倍以上必要とする。ちなみに吸収して使えるようになった能力は以下の通り。

イクシード

トライバルエンド

・超越技天竜風拿翔・・・獅子神黎真配下の下位元神霊から奪った物。聖時自信が、紋章の吸収の光りの試し撃ちで奪った物。両の腕に纏った風を相手にぶつけて、相手の四肢を風で拘束する技。バインドより拘束する力、拘束する際の速さが早い。

イクシード

・超越技スタンピード・・・元神霊のシュタイナーと戦った時に習得した物で、術者と同等の力を持つ4体の分身を出す技なのだが、聖時はこの技を完全に使いこなす事ができず、3体までしか出す事ができない。

・アクセルシュート

聖時が暴走した時、高町なのはから奪った技。威力、性質、共になのはの物と同じ。ただし、魔力球の色は、聖時の魔力光である白色をしている。

ゲートオブバビロン

・王の財宝

この能力だけは聖時が吸収した物ではなく、聖時が光輝の紋章を宿した時、初めから紋章内に入っていた者である。おそらく、コレは前の紋章の持主、聖時の父親、聖がコピ―吸収した者だと思われる。能力の詳細は消費魔力以外は英雄王・ギルガメシユの者とほぼ同じであるが、聖時はコレを殆んど使いこなしていない。と言うのも、ゲートオブバビロン王の財宝中に入っている物の殆んどは、使い手ではない聖時では真名解放が出来ず、剣群を雨のように降らせると15秒しか持たなくその後は、魔力が空になってしまったため、今ではドラ○もんの四次元ポケットのような、物をしまっておく便利な携帯物置と化している。ゲートオブバビロンなお王の財宝の設定は一部この作品オリジナルの物になっている。

所持能力

・ニューロマンシー

魔力を使い、相手の心に接続して記憶を操作したり、操ることができる能力。ただし、この能力は相手に触れた上に、サポーターをかねているピティの協力の下、相手の瞳を見、視界を確保しなければ接続できない。また、相手の心を守る防壁が硬くて突破できない場合も接続できない。

なお、魔力を使って接続するから、便宜上ニューロマンシーと分類されているが、操作方法等は、魔力を必要としないSEシナプスエンジンアリンケの物とほぼ同じである。

ドラムン 竜の紋章

聖時の中に流れている、ドラムン竜の騎士の力が発言された時、額に浮かび上がる物。この紋章が浮かび上がると、魔力が増大し、体の周りがドラムン竜闘気で覆われ体が頑丈になる。また体を覆っている竜闘気ドラムンを持っている武器等に纏わせると、闘気剣を使えるようになる。なお聖時

は、この能力を使う時はこの能力に小宇宙^{コスモ}を混ぜて使っている。

習得済みの技

アバン流刀殺法

・大地斬 ・海波斬 ・空裂斬 ・アバンストラッシュ

飛天御剣流

・天翔龍閃以外のすべての技

廬山翔龍霸^{ろざんしょうりゅうは}

廬山龍飛翔^{ろざんりゅうひしょう}

オリジナル技1つ

習得呪文一（ドラクエ系）

・火炎呪文^{メラ}・中火炎呪文^{メラミ}・閃熱呪文^{ギラ}・中閃熱呪文^{ヘギラマ}

・真空呪文^{バギ}・中真空呪文^{バギマ}・極大真空呪文^{バギクロス}

・氷呪文^{ヒヤド}・中氷呪文^{ヒヤダルコ}・大氷呪文^{ヒヤダイン}

・爆裂呪文^{イオ}・中爆裂呪文^{イオラ}・電撃呪文^{ライデイン}

・回復呪文^{ホイミ}・中回復呪文^{ペホイミ}

・鋼鉄化呪文^{アストロン}・魔法無効化呪文^{マホステ}・守備力強化呪文^{スカラ}

・加速呪文^{ピオリム}・瞬間移動呪文^{ルーラ}・瞬間合流呪文^{リリルーラ}

・強制瞬間移動呪文^{バシルーラ}・飛翔呪文^{トペルーラ}・睡眠呪文^{ライホー}・幻惑呪文^{マヌーサ}・照明呪文^{レミトラ}・

扉開呪文^{アバカム}・迷宮脱出呪文^{リレミット}

その他系

フランス・エクサルマティオー
・風花・武装解除・ミッド式封鎖結界魔法

備考

聖遼学園意識不明事件解決後、真の紋章の宿主になった聖時は、民間協力員として特務捜査課に所属する事になった。その後、魔王軍群団長の一人の獅子神黎真ししがみれいしんとその配下の元神霊もとみつたまや下位元神霊トライバルエンド、さらに、黎真が復活させた真神との戦いで自分の中に眠っていた竜の騎士としての力と、小宇宙コスモに目覚める。なお、小宇宙コスモを使う時、聖時はドラゴンの紋章を浮き上がらせる。
管理局や魔法使い関係者からは、真神まさがみを倒して、第97管理世界を救った事により、「光輝ひかりの勇者と言われている。

ピティ「……これが今の聖時の能力ね。」

カモ「何と言うか、中途半端なチートといった感じだな。」

ピティ「たしかにね。まあ予定では、これからさらに強くなって行って、最終的にはチートキャラになるみたいだよ。」

カモ「やっぱり最終的にはチートキャラになるのかよ……」

ピティ「まあ回を重ねることに強くなるのは、少年マンガ等では王道だから良いじゃない。では今回はココまでにします。」

カモ「ちなみにこのコーナーは不定期になるから、そこん所よろしくな!」

ピティ「ではでは」

第2話 学園長はぬらりひょん？（前書き）

どうも剣 流星です。

どうにか第2話が形になったので投稿します。

ちなみにこの作品に力を入れすぎたために、もう一つの作品の「真の紋章と竜の騎士」の作品の完成が遅れそうなのでこの場でお詫びも上げます。すいません。

では第2話をどうぞ。

第2話 学園長はぬらりひょん？

第2話 学園長はぬらりひょん？

目の前にある理事長室の扉をネギはノックした。

コンコン

???「おおつ、来たか！どうぞ。」

扉の中から老人の声が聞こえてきた。

ネギ「失礼します。」

そう一言を言ってからネギは部屋と入り、聖時達もそれに続いた。

ネギ「学園長、高町さんと神谷さん一家の方たちをお連れしました。」

近右衛門「おお、ご苦労だったなネギくん。」

そう言いながら、近右衛門はネギの後ろに立っている聖時達を見た。近右衛門は、かの管理局で有名な「エース・オブ・エース」、そして、ココにいるネギと同じく、赤き翼アラルブラのあの英勇「竜帝の聖りゅうていひじり」の子がどんな者なのかと興味津々と言った感じで見ていたが、その見られている当の本人達は……

なのは（……ぬらりひょうだ。）

聖時一（ぬらりひよんだな。）

ピティ（妖怪ぬらりひよんね。）

ゆめみ（ぬらりひようんですね。）

などと、結構失礼（？）な事を心の中で言っていた。

聖時（ヒソヒソ）ねえゆめみ、確かこの学園の学園長はこのかのお爺さんで、確か人間じゃなかったっけ？

ゆめみ（ヒソヒソ）は・・・はい、そのはずですが・・・

ピティ（ヒソヒソ）アレが人間？！どう見たって妖怪でしょう？！ぬらりひようんでしょう？！

なのは（ヒソヒソ）確かに、あの異様に長い後頭部を見れば、人間じゃないと思うけど・・・

ピティ（ヒソヒソ）だよね、あんな異様な後頭部の持主が人間はわけが無いよね！

聖時（ヒソヒソ）確かにそうだね、じゃあやっぱり妖怪ぬらりひようんなのかな？

ピティ（ヒソヒソ）きっとそうだよ、そうになると、孫のこのかもこのぬらりひようんの血を引いているから、ぬらりひよんの孫って事になるね。）

聖時（ヒソヒソ）おい、そのよび方だと、まるでこのかが妖怪任侠の組長をやっていて、妖怪だけを切ることが出来る刀を振り回してる事になるぞ）

近右衛門「あゝ、聞こえてるんだがのう。」

聖時達「「「へっ!?」「」」」

ヒソヒソ話をしていた聖時達は、近右衛門の一言で驚き、同時に近右衛門の顔を見た。

近右衛門「言っておくが、ワシはれっきとした人間じゃからのう。だから当然、孫の木乃香も、れっきとした人間じゃからのう。」

聖時「あ、あははははっ……すいません。」

近右衛門「うむ、解ればいい。さて、改めて自己紹介をさせてもらおう。ワシがこの麻帆良学園の学園長をやっている近衛近右衛門である。神谷聖時くん、ワシ等麻帆良学園は君の転入を歓迎しよう。」

聖時「ありがとうございます。」

近右衛門「さて、君は明日から、そこに居るネギくんが担任をしている中学の、3・Aのクラスに入るように手続きをしてある。」

聖時「え?!ネギが担任?!」

近右衛門「そうじゃ、そこに居るネギくんは教師として、前の学期も担任を立派に務めておるから心配せんでもいい。ワシが保障しよう。」

聖時「あ・・・はあ・・・」

聖時は不安想な顔でネギの顔を見た。

ネギ「大丈夫ですよ神谷さん、前の学期で自信を付けましたから、大船に乗った気持ちでいてください!!」

ピティ（大船ね、泥舟の間違いじゃないかな）

聖時「あ、はあ、よろしく。」

近右衛門「それと、荷物はすでに来迎寺グループの人たちが寮に運びこんでおったから、この後、荷物の荷解きをしていきなさい。」

聖時「あ、はい。」

近右衛門「それと、コレを・・・」

そう言つて近右衛門は自分の足元に置いてある箱と本数冊、本の方はどうやら教科書のように、箱の方は、どうやら衣装箱みたいである。

近右衛門「コレは明日から行く中学校の教科書と制服じゃ。制服のサイズは合っていると思うが、この後、着てみてサイズを確認してみておくと良い。」

聖時「何から何まで、ありがとうございます。」

そう言つて聖時は机の箱を手を取った。

ピティ「ねえねえ、どんな感じの制服なのか、開けて見て見ようよ！」

聖時「しょうがないな、開けて中身を見るだけだぞ。」

ピティ「うんうん。」

そう言つて聖時はその場で、制服が入っている箱を開けて……固まった。

聖時「……あのコレって……」

ピティ「……制服だね、女子の……」

ゆめみ「あら いいじゃないですか、聖時さんにとっても似合いそうな感じの制服です」

聖時「……ゆめみ、本気で言ってるの？」

ゆめみ「もちろんです。後で試着した後、撮影会をしましょうきつと制服を着た聖時さんは、顔を真っ赤にしながら、恥ずかしそうにスカートを押さえて、少し涙目になって……」

ゆめみはその姿の聖時を想像したのか、ウツトリとした顔でトリップし始めた。

ゆめみ「ハア（ウツトリ）／／／／／」
ウツトリ顔で、トリップし始めるゆめみを見て、なのはが「コレはまずい！」と思い、ゆめみの両肩を掴んでゆすり始めた。

なのは「ゆめみさん！ゆめみさん！こんな所でアッチの世界に旅立たないで！」

聖時「ハア、ゆめみのまた悪い癖が出たか……。なのはさん、ゆめみはそんな起こし方じゃ、アッチの世界からは帰ってこないよ、ピティ！」

ピティ「OK！そんなじゃ……。久々のピティちゃんキーーク！！！」

ドゴツ！

空中を加速してからのピティノキックがゆめみの顔に決まり、正氣に戻るゆめみ。

ゆめみ「ハッ！わ……。私は……」

聖時「ふう……。まったく手間がかかる……。さて学園長、コレは女子の制服ですね？」

近右衛門「そうじゃが？何を当たり前のことを言っておる、明日から君が行く所は女子校なのだから、制服が女子なのは当たり前じゃろう。」

聖時「……。はあ？！女子校？！」

近右衛門「？そうじゃが、何か問題でもあるのかのう？」

聖時「問題も何も、俺が女子校に行ったら大問題でしょう！！」

近右衛門「なぜじゃ？女の子であるお主が女子校に行くことの何が問題なんじゃ？」

聖時「……へ？俺が女の子？！」

近右衛門「そうじゃが……何か？」

聖時は近右衛門の聖時が女の子発言聞いてしばらくフリーズしたが、次の瞬間怒ったような顔で近右衛門に怒鳴るように言った。

聖時「俺は男です！！一体何処から俺が女だって考えが出てきたんですか！！」

突然起こり始めた聖時に訳がわからないと言う様な顔をする近右衛門。

近右衛門「い……いや、何処からも何も……送られてきた書類の性別の欄には、女の所に丸が付いておるが……」

そう言いながら近右衛門は机の引き出しから書類を出して聖時達に見せた。

その書類には聖時の顔写真と名前の所にはカタカナで、セージ・カミヤと書いてあった。

そして、性別の欄には、近右衛門の言うとおり、女の方に丸がついてあった。

ピティ「ありゃ、コレは確かに女の方に印が付いてるね。」

なのは「確かに……これじゃあ事情を知らない人は女の子だと勘違いしちゃうね。」

ゆめみ「確かにそうですね、聖時さん……ただでさえお母様の千尋さまそっくりの顔をしているのですから、間違われて当然ですね。」

聖時「……そんな……ココでも女と間違われるなんて……」
「OTZ」

ネギ「せ……聖時さん、その……元氣出してください。（お……男の人だったんだ。気づかなかった）」

男だと知って驚いた事を隠しながら聖時に声をかけるネギ。

近右衛門「……その様子だと、どうやら本当に男みたいじゃのう。しかし、そうなるのとちと困ったことになるのう。いまさら変更はできんからな」

聖時「へ？変更できない？！」

近右衛門「そうなのじゃよ。コチラはお主が女の子だと思って手続きを続けていたからのう。」

聖時「そ……そんな……ん？まてよ……まさかさつき荷物を運び込んだって言ってた寮って……」

近右衛門「むろん女子寮じゃが？」

聖時「は、はははは……」
「OTZ」

再びうなだれる聖時。

近右衛門「さて、困ったのう……うん？」

ふと近右衛門は何を思ったのかじつと聖時の顔を見はじめた。

聖時「な……なんです？」

近右衛門「そうじゃ！いい事を思いついた！」

ピティ「い……良い事？」

聖時「なんかヤな予感……」

近右衛門「聖時くん、この書類の通り、君は明日から女装して女の子として学校に通うんじゃ……！」

聖時「じょ……女装して女子校に？」

近右衛門「そうじゃ、幸い君は母親似の顔をしているから、女装をして女だと言えはれる事は無い！そうじゃソレで行こう！コレで万事解決……」「何が解決だ……！火炎呪文……！」ひよっ……！？」

突然聖時の手から放たれた火炎呪文^{メラ}を驚きながらもかわす近右衛門。

聖時「チツ！かわしたか……なら次は中爆裂呪文^{イオラ}で……！」

なのは「せ……聖時くん！いきなり何してるの？！」

ネギ「そうです！いきなり魔法で学園長を攻撃してどうしたんですか？！」

いきなり攻撃をした聖時を後ろから羽交い絞めにして止めるのはとネギ。

聖時「離してください！俺に女装して女子校に行けなんてアホな事を言うこの妖怪を今から退治するんです！！大体女装して女子校に行くなんて、何処のギャルゲーですか！！」

ピティ「うゝん、おとぼけ？か、恋たて？」

聖時「まじめに答えるな！！」

近右衛門「ま・・・まてまて！落ち着くんじゃ！じゃあこうしよう！学校の変更は今からじゃ無理じゃから、お主を今後ある、共学化に向けてのテストケースとするのはどうじゃ？」

聖時「へ？テストケース？！」

近右衛門「うむ、最近少子化が進んでおるから、女子校、男子校では経営できなくなってきたおるのじゃ。そこで経営方針として共学にしようと言う動きがあつての、そこでお主を共学化にする為のテストケースとして入ってもらふ。どうじゃ、これなら良いじゃろっ？」

聖時「・・・女装しないだけマシか。仕方ありません、その案で良いです。けど寮の方はどうするんですか？」

近右衛門「それは高町くんが住む事になる、女子寮の離れの管理人

室に高町くん達と一緒に住むのはどうじゃ？あそこは以外に広いから、三人で暮らす事ぐらい出来るぞ？」

聖時「え！はのはさんと一緒に？！そんなのダメに・・・」「私はそれで良いと思うよ？」って、へ？！」

なのはの「それで良い」発言に驚きなのはを見る聖時。

聖時「な・・・何言って・・・」

なのは「今更恥ずかしがる間柄じゃないでしょう？小さい頃はよく一緒に寝ていたじゃない。「一人じゃ怖くて寝られない」って言うて。」

聖時「何年前の事を言ってるんですか？！って言うか、人の黒歴史をサラッと人前で暴露しないでください！！」

ゆめみ「そうですね、確かに小さい頃の聖時さんはよく添い寝を言ってきたくれましたね。あの頃の聖時さんは可愛かった（ウツトリ）」

聖時「ゆめみも人の黒歴史を暴露するな！！それとトリップするな！！」つたく・・・で、学園長、俺を呼んだ理由についてそろそろ話してもらいませんか？」

近右衛門「おお、そうじゃな。では本題にはいろう。実は君の麻幌良学園転入を許可したのは、君にある生徒の記憶喪失の治療の手助けうをしてもらったためなのじゃ。」

聖時「記憶喪失の生徒・・・それは事前に連絡があった・・・」

近右衛「そうじゃ、咲^{サキ}くんのことじゃ。彼女は前学期、そこにいるネギ先生が生徒達と一緒に、図書館島と言っこの学園の大図書館の奥の方で倒れておった所を発見されての。」

聖時「ネギが発見を……」

ネギ「はい、僕が教えている2・Aの生徒のアスナさん達と一緒に図書館島の最深部を目指していたんです。それでその最深部に辿り着くと、そこにアスナさん達と同じぐらいの女の人が倒れてたんです。」

近右衛門「ワシ等はネギくんの話聞いて、そこに倒れていた彼女を早急に保護した。それから丸一日経って、彼女は目を覚ましたが、彼女は自分の名前と自分がレーヴァテールという種族だと言っ事、そして……キミとふたばと言っ少女の事と、その二人とした約束について以外何も覚えていないのじゃ。」

聖時「そ……そうだったんですか……サキの記憶が……」

聖時はかつて、女神アテナに精神体で聖域^{サンクチュアリ}に召還されたときに出会ったレーヴァテールの少女サキ。彼女とふたばと共に誓った再会の約束の証である花輪を手で触りながら、聖時は彼女のことを思った。

聖時「あの時した再会の約束とは別にした、俺自身が誓った事……ふたばとサキを守る」と言っ誓い……ふたばは守る事ができ無かったけど、サキだけは！」

そう聖時が思っていると、ネギが聖時に話しかけてきた。

ネギ「聖時さんは難波さん……咲さんの事を知っているんですか?!」

聖時「難波?」

ネギ「あ、サキさんに宛てられた仮の苗字です。サキさんは今、僕の受け持つ2-Aの生徒として学園に通う生徒扱いで麻幌良学園が身柄を預かってるんです。で、聖時さん、サキさんの事を知ってるんですね?! 教えてください! サキさんは何処の誰で、どうして図書館島の最深部に居たのかを!」

聖時「え!? あ……あの……」

ネギはまくし立てるように話しながら聖時に詰め寄り、聖時はそれに驚き声を詰まらせた。

近右衛門「落ち着きたまえネギくん。そんな風に詰め寄っては聖時くんも話せないじゃろう?」

ネギ「あ……すいません! つい……」

聖時「あ……うん、別にいいさ。ちょっと驚いただけだし。」

ネギ「本当にすいません……サキさん……記憶がない事で悩んでいて、それで……」

聖時「そうか……けど、記憶喪失の原因については俺自身も詳しい事は知らないんだ。ただ、前にサキ自身から『時々自分の記憶無くなる事がある』と聞いたことがあるだけだし、サキ自身の事も麻帆良学園に来る前にそちらに知らせた事意外は知らないんだ。」

ネギ「そうですか……。」

聖時の話を聞いて落胆するネギ。

近右衛門「そう気を落とすなネギくん、サキくんの事について、ほんの少し解っただけでも良しとしようじゃないか。」

ネギ「そうですね。」

聖時「すいません。あまり力になれなくて……しかし、俺を呼んだのは、俺がサキの知人だからですか？」

近右衛門「たしかにそれもあるが、君は相手の記憶を操作できるユーロマンシーと言う力があるじゃろう？それでサキくんの記憶を取り戻す為の手助けをしてもらおうと思ってな、それに君はサキくんと同じレーヴァテールの血を引いても居るから、サキくんも親しみやすいと思ってな。」

聖時「そうだったんですか。しかし……記憶を取り戻す手助けか……。」

近右衛門「難しく考えなくてもよい。ただ友人としてサキ君の側に居てあげるだけでも良いのじゃ。じゃからもっと気を楽しにのう。」

聖時「あつ……はい……。」

近右衛門「ああ、それと、あとっておく事が一つだけあるんじゃないか……。」

聖時「？何です？」

近右衛門「実は孫の木乃香に付いてなのじゃが……」

聖時「木乃香のことについて……もしかしてまだ木乃香に魔法関係の事を話していなかったんですか？刹那を通して話しておいたじゃないですか！本人に話しておいたほうが、本人の為になるって言うて！」

近右衛門「うむ、そうなんじゃがの……ワシは話しても良いと思うんじゃが、アレの父親が頑なに話さない方が良いと言うのじやよ……」

聖時「詠春おじさんが？……隠し事はいつかはバレる物なんですから、話しておいたほうがいいのに……下手をすると、無自覚なままで魔法関連の事に巻き込まれるのが目に見えてるのに、何を考えてるんだろう……」

近右衛門「うむ、確かにそうじゃ。同じように魔法の存在をひた隠しにされていた聖時くんと言う例があるのじゃが、それでも言うので、ワシ等の方が折れて今日まで来たのじゃからのう。」

聖時「はあ、なぜそんなに隠そうとするんだろう……とにかく、解りました。なら俺からはもう何も言いません。」

近右衛門「うむ、ではよろしくのう。さて、話は以上じゃ、では学校に送る資料等の変更は此方で進めておくから、聖時くんとピティくんは、ネギくんの案内で寮に行つて荷物の荷解きをしておきなさい。」

聖時「あ、はい。」

なのは「聖時くん、私とゆめみさんは、まだ学園長さんと話さなきゃならない事があるから、先に寮に行つて、着いてる荷物の荷解きをお願いね。」

聖時「はい、わかりました。」

ゆめみ「お手数をおかけして、申し訳ありません。」

聖時「いいよ。それじゃあネギ、案内頼む。それでは学園長、失礼します。」

ネギ「失礼します。」

ピティ「しまゝす。」

近右衛門に挨拶をしながら、部屋を出て行く聖時達。

後には、この部屋の主である近右衛門となのは、ゆめみが残された。

近右衛門「さて、高町くとゆめみくんには仕事の話をしなくてはな。」

なのは「はい。」

ゆめみ「はい。」

近右衛門「まずはゆめみくんには、女子寮の管理人をやってもらつ。女子寮は今、管理人が居ない状態なのでな。」

ゆめみ「はい、解りました。」

近右衛門「仕事の内容は、このノートに書いてあるから、しっかりと読んで把握しておいてくれ。今の女子寮に住んでいる者たちは、何かと元気で騒がしい者達が多いから気苦労が絶えんと思うが、がんばってくれ。」

ゆめみ「大丈夫です。騒がしい子達の相手は向こうの世界でやっていましたから。」

そう言つてゆめみは、去年まで聖時の別荘に集まっていたメンバーを思いだし、苦笑いをした。

近右衛門「それは頼もしいのう。さて、次は高町くんだな。高町くんは一応、管理局から教導の為の出身になっておるが、表向きは教師としてココに來た事にしておいて欲しい。」

なのは「教師……ですか？」

近右衛門「そうじゃ、君には聖時くんが編入する3 - Aの副担任として、担任のネギくんのサポート役をもらう。3 - Aの副担任なら、君が管理局から受けた、もう一つの仕事もし易いじゃろう。」

なのは「……確かにそうですね。」

なのはは辛そうな顔をしながら返事をした。

近右衛門「辛いじゃろうのう、自分の弟分とも呼べる聖時くんを監視し、もし彼の持っている「光輝ひかりの紋章」が暴走した時、紋章を彼ごと封印、最悪の場合は抹殺しなくてはならないのだからのう。」

なのは「……でも……それは仕方がない処置だと思えます。現に、あの子は一度、紋章を暴走しかけた前科があります。上層部の方では、その事であの子を即刻、紋章ごと封印すべきだと言う人もいますから、猶予が有る分だけ、この処置の方がマシです。」

近右衛門「そうか……まあ、最悪の状況などは滅多にならないのが常じゃから、そう悲観しなくてもいいと思うぞ。むしろ、管理局の馬鹿者共の取り越し苦労で終わるじやろうとワシはそう思っている。」

なのは「そうですね。最悪の状態なんてならないのが一番ですようね。」

ゆめみ「確かにそうですね。」

近右衛門「うむ。さて、では次に高町くんにやってもらう仕事の細かい所は……」

そう言いながら近右衛門はなのはに仕事の細部について話し始めた。

*

一方、ネギと共に理事長室から出た聖時とピティは、女子寮へと向かっていた。

聖時「そう言えばネギは今、どこに住んでるんだ？」

ピティ「もしかして教員寮？だとしたら大変でしょう。子供の一人暮らしって。」

ネギ「いえ、実は僕も女子寮に住んでるんです。」

聖時「え！？ネギも女子寮に住んでるのか？」

ネギ「はい、女子寮の明日菜さん、木乃香さんの643号室と一緒に住んでいます。」

聖時「え！？木乃香とアスナ、二人と一緒に住んでる！？」

ピティ「だとしたら大変でしょう？魔法の事を同室の人に……そのうち一人は学園長から魔法に関してはくれぐれもばれない様に言われた木乃香でしょう？大変じゃない？」

ネギ「大丈夫ですよ。もう一人の同居人である明日菜さんが魔法に関しての秘密を守るのに協力してくれますから。」

聖時「うん？協力？ちょっと待て、明日菜は確か魔法関係者じゃなかったと思うが？」

ネギ「ええ、そうでしたけど……聖時さん、明日菜さんの事を知っているんですか？」

聖時「まあな、このかと同じで、父さん関係の筋で知り合った幼馴染みたいなのだよ。それよりも、なんでアスナが魔法に関しての秘密を守ることに協力してくれるんだ？」

ネギ「え．．．え」と実は．．．．．」

．．．．．

聖時・ティピ「はあ！？ココに来て早々に魔法の事がバレた相手だあ！？」

ネギ「え、ええ、そうなんです。」

聖時「しかもその時に魔法の事を秘密にしてもらったように頼んでOKしてもらい、その後も色々魔法の秘密がバレそうになった時にフォローしてもらったって？」

聖時は少し呆れたような顔をしながら言った。

ネギ「は・・・はい、そうなんです。」

聖時「はあ、開いた口が塞がらないってこう言つのを言うんだな・・・」

ピティ「だね。まっ、もっとも聖時は人の事をいえないと思うけどな」

聖時「ん？どう言うことだよ？」

ピティ「忘れたの？中一の時、ふたばや猛たち、由香や裕也と次々に魔法の事がバレたのはどこの誰だっけ？」

聖時「うっ！」

ピティ「名づけ親とその子供って似るものなのかね。」

聖時・ネギ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

互いに複雑そうな顔で見る聖時とネギ。そんな時、突然聖時の頭に声が響いてきた。

???（だ・・・れ・・・か、・・・た・・・け・・・て）

聖時「!？」

ピティ「ん？どうしたの聖時？」

聖時「声が……………」

ピティ「声？」

ネギ「？どうしたんです？」

ネギは突然立ち止まった聖時に声をかけた。

???（た……………す……………け……………て、だれか……………
・アスナ……………ちゃんを……………た……………す……………け……………て、たす
けて！！）

聖時「これは……………誰かが助けを求めてる！」

ネギ「え？助け？」

ピティ「聖時？」

聖時「コツチだ！！」

そう聖時は言うと、女子寮とは別の方向へと走り始めた。

ネギ「え？！聖時さん！どこに行くんです！？」

ピティ「聖時！？」

突然走り始めた聖時に置いてけぼりを食らう二人。

ネギ「ど．．．どうしたんでしょうか？」

ピティ「わかんない。けど、聖時はどうやら誰かの助けを求める念を感じ取ったのかも．．．」

ネギ「え？念？」

ピティ「とにかく、私たちも後を追いましょう。」

ネギ「あ、はい！」

そう言つて二人も聖時のい後を追つて行つた。

《つづく》

第3話 塔の少女との再会（前書き）

どうも、剣 流星です。

ようやく更新することができました。

なお、第1話と2話も少し改変してあるので、そちらも読んでください。

それではどうぞ。

第3話 塔の少女との再会

第3話 塔の少女との再会

聖時とネギが理事長室から出た時間から少し遡る。

聖時達が降り立った駅の前近くの通り。そこに中学生ぐらいの女の子たちがアチコチの地面を見ながら歩いていた。その内の一人はツインテールの少女、神楽坂明日菜、もう一人は黒髪でロングの少女、近衛木乃香、そして、金髪でロングの髪をしている、聖時達の話しに上がっていた少女、難波サキである。

サキ「うーん、見つからない・・・」

明日菜「コッチにも無いわね。」

木乃香「あかん、こっちにも無い。」

明日菜「・・・ねえサキ、本当にこの辺りなの？ペンダントを落としたの？」

サキ「落としたとしたら、この辺りしかないので、たぶん・・・」

そう言いながら再び地面を見ながら歩き始めるサキ。

彼女は今日の午前中、この辺りで買い物をしたのであるが、その買い物帰りに自分の大切なペンダントが無いのに気付き、明日菜達に協力を頼み、再びココに赴いたのである。

サキ「ゴメンね二人とも。本当は二人とも午後から用事があつたんでしよう?」

明日菜「まあね、知り合いが久しぶりに麻幌良学園（こまほら）に来ることになっていたので、会おうと思ってただけだね。」

木乃香「へー、明日菜もなの? ウチも今日、幼なじみの子が来るゆうてたんや。」

サキ「二人とも、久しぶりに知り合いに合うのにサキ何かに付き合わせてしまってスイマセン・・・」

サキは二人に申し訳ないと思い顔を伏せてしまった。

明日菜「別に良いわよ。今日だけしか居られないって訳じゃないから。」

サキ「え? そうなんですか?」

明日菜「転校して来るのよアイツ。だから、少し位会つのが遅れたってたいしたことないわよ。」

明日菜は綺麗な長い髪と、光の加減でエメラルドの色に見える瞳を持った、女の子のように見える、幼なじみの男の子を思い出して言った。

木乃香「え？なんや明日菜の知り合いも麻幌^{マッパ}良学園に転校してくるんか？」

明日菜「え？「知り合いも」って木乃香、あんたが今日会う幼馴染みも転校してくるの？」

木乃香「そや。」

サキ「なんかすごい偶然ですね。もしかしたら同じ人だったりして・・・」

明日菜「そんなまさか」

そんな風に三人で話しながら歩いていたのが悪かったのか、一番前を歩いていたサキが誰かと物かとぶつかってしまった。

ドンッ！

サキ「きゃっ！」

????「うおっと！」

サキはぶつかった拍子に尻餅を付いて倒れてしまった。

木乃香「サキちゃん、大丈夫か？」

サキ「イタタタッ・・・だ、大丈夫です。」

明日菜「まったく、気お付けなさいよ。」

サキ「はい、あ、すみません、ぶつかってしまつて。」

そう言つてサキはぶつかった相手に向かって頭を下げた謝つた。

???「ああつ！兄貴にぶつかつて謝つただけで済むと思つてるのかこのアマツ！」

突如、サキがぶつかった相手の側にいたがらの悪そうな男が、声を荒らげてサキに怒鳴つてきた。

明日菜「な、なによ！サキはちゃんと謝つたでしょ？だつたらそれで良いじゃない！なに因縁付けて来るのよ！」

気が強い明日菜が、怒鳴つて来た男に対して、サキたちを庇いながら男に言い放つた。

サキがぶつかった相手は周りに数人のガラの悪い男を連れていた。先ほど怒鳴つてきたのはその連れの一人である。

取り巻きの男1「謝れば済むつてもんじゃないんだよ！俺らの商売はな、舐められたら終わりなんだよ！それにな、こちらら今機嫌が悪いんだよ！！」

取り巻きの男1が訳の分からぬ事を言い放ちながら明日菜にじり寄る。

明日菜「な・・・なによ?！」

にじり寄せられた明日菜は少し怯んで後ずさる。

???「・・・ピラ、少し待て。」

取り巻きの男1「え？兄貴？」

サキがぶつかった男・・・兄貴と呼ばれた男は取り巻きの男1を呼び止めた。

???「ピラの言うとおり、今の俺たちは機嫌が悪い。だからアンタラのその体で憂さをはらせてもらおうか？」

木乃香「か・・・体でつて・・・」

木乃香が怯えて自分の体を抱きながら後ずさる。

明日菜「あ・・・あんた達、私達に何するつもりよ！」

???「さっき言った言葉の通り、あなた達の体で、俺たちの憂さをはらせてもらうんだよ！」

最近“力”を使って人を殺し過ぎたせいで、自称「正義の魔法使い」を名乗るやからに目を付けられた拳句、襲撃までされてイライラしていたんだ。ああ、安心しろ、憂さが晴れたら開放してやるよ。もつとも・・・それまでに生きていたらの話だけだな！」

明日菜はこのままではこの男達に「殺される！」と思い、自分の後ろにいる二人に声を上げて言い放つ。

明日菜「二人とも逃げるわよ！」

明日菜の声を聞いた二人は、一斉に逃げ出し、明日菜もそれに続いた。

だが、逃げ出すことを読まれていたのか、明日菜達は取り巻きの男

たちに取り押さえられてしまった。

ピラ「おっと、逃がすかよ！」

取り巻きの男2「逃がさないんだな。」

木乃香「い、痛い！放して！」

サキ「放してください！」

???「そう言うわけにはいかないんだな。俺としても久々の女殺しだから逃がしたくわないんだよ・・・だ・か・ら・大人しく俺に切り刻まれる！！」

明日菜「なっ！」

明日菜は男の目を見てゾツとした。その目は明らかに異常な者の目をしていて、人を殺すのがとても楽しいみだと言う顔をしていた。

???「さて・・・ここじゃあ目立つな・・・場所を変えよう。」

取り巻きの男「はい、張の兄貴。」

そう言って男の取り巻きの男達は明日菜達の口を手で塞いだ後、数人がかりで三人を無理やり路地の裏の方に連れていった。

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

街には何処にでも、裏通りや、人気のない場所というものがある。
それは麻幌良学園にも存在する。

サキ達三人は、そんな人気の無い少し開けた場所へと連れてこられた。

サキ達三人は開けた場所の中央で一塊になって、互いを支え合いながらその場にいた。

そんな三人をぐるりと囲むように張と名乗ったチンピラ達がニタニタと笑いながらサキ達を見ていた。

張「さてと・・・憂さを晴らすと言っても、ただ殺すのは芸がない。そこで・・・お前たちにチャンスをやろう。」

そう言つて張と名乗っていた人物は、どこかで拾ってきたのか、手に持っていた鉄パイプをサキ達三人の前に放った。

明日菜「？」

張「そいつを使って1対1でこの俺に一撃入れたら、お前達三人を見逃してやるよ。」

サキ「え？」

木乃香「み・・・見逃す？」

張「ああ、本当だ。それで、誰から来る？」

張と名乗った男はサキ達の前に出ながら聞いてくる。

明日菜「・・・まずは私からよ！」

明日菜はそう言いながら、落ちている鉄パイプを拾って構えた。

木乃香「あ、明日菜！」

サキ「危ないですよ！明日菜ちゃん！」

明日菜「大丈夫だって二人とも。私、結構運動神経良いの知ってるでしょう？」

明日菜はそう言いながら、心配させないよう二人に笑顔で答えるが、その手は震えていた。

張「まずは元気な嬢ちゃんからか。元気なのは良いな。やっぱり・・・狩る獲物は噛み付くぐらいの元気がなきゃ、切り刻みがいい！！」

張がそう言って構えを取ると、それを見た明日菜は鉄パイプを持って、張に突っ込んだ。

明日菜「余裕ぶっこいてるんじゃ無いわよ！！」

鉄パイプを持って張に突っ込んだ明日菜の速度は普通の人に比べて速いものだった。

張「ほう……」

張はそれに少し驚くが、明日菜が振り上げて振り下ろした一撃を余裕でかわす。

明日菜「くっ！よけられた！」

張「ほうっ……嬢ちゃん結構早いな。これはますます切り刻みがいがある。」

そう言った張は、手を手刀の形にして構える。
すると、その手刀がうつすらと光だす。

明日菜「な……なにあれ？」

木乃香「手が……光ってる？」

サキ「あ……あれは一体？」

三人がそれぞれ驚く中、三人を取り囲んでいる、張の取り巻き達は、それを見慣れているのかそれぞれにそれを見てじゃべり出す。

取り巻きの男1「出るぞ……張の兄貴の超越技イクシードはくじんせんこう薄刃斬光！！」

取り巻きの男2「ヒヤッホウッ 解体ショーの始まりだ！！」

張「まず手始めに・・・そうだな利き腕じゃない左腕から逝くか・・・」

明日菜「え？」

張「超越技イクシード薄刃斬光！！」

張の技の名前の叫びと共に光る手刀が振るわれる。すると振った手刀から白い光で出来た極薄の光の帯びの刃が明日菜に襲い掛かり、左腕を切り裂いた。

明日菜「うつ・・・あああああつ」

左腕を切り裂かれて血を流し、その傷口を右手で抑え、左手で鉄パイプを持ちながら、その痛みに耐える明日菜。

木乃香「明日菜！」

サキ「明日菜ちゃん！（誰か・・・明日菜ちゃんを・・・このままじゃ明日菜ちゃんが・・・誰か・・・明日菜ちゃんを助けて！！）」

二人は腕を切りさかれた明日菜を見て駆け寄ろうとする。だが、突然後ろから羽交い締めになされてその動きを止められた。

取り巻きの男3「おっと、お嬢ちゃん達の番はまだまだだぜ。」

取り巻きの男4「大人しく、お友達が切り刻まれるのを黙って見てな！」

木乃香「は・・・放して！明日菜、明日菜、明日菜あああ」

取り巻きの男3「うるせえ！」

ドゴツ！

鈍い音が響く。

木乃香は男に首筋に手刀を入れられて崩れ落ちる。

取り巻きの男3「まったく、騒ぐからそうなるんだ。」

明日菜「木乃香！！」

明日菜は崩れ落ちる木乃香を見て叫ぶ。

張「余所見なんてしてる場合か！！」

そう言つて張はまた薄刃斬光を振るい、今度は明日菜の右足の太腿を切り裂いた。

明日菜「グッ！！」

サキ「明日菜ちゃん！！」

張「状況が分かって無いみたいだな・・・殺されかけてるんだぞ？他人の事気にしてる場合じゃないだろが。他人気にしてると・・・すぐに死ぬぞ！！」

張はそう叫びながら、今度は乱れ打ちみたいに、次々と薄刃斬光を放つて、明日菜を切り刻み始めた。

明日菜「あ、あああああああつ!!」

嵐のような光の刃の奔流が起こり、やがてそれが止むと、そこには、体中を切り裂かれて血を流している明日菜が倒れていた。

サキ「明日菜ちゃん!!」

サキは倒れている明日菜を見て、サキは自分を取り押さえている男を振り払い、明日菜の下に駆け寄る。

サキ「明日菜ちゃん!明日菜ちゃん!!」

倒れている明日菜を揺さぶり声をかけるサキ。

明日菜「サ……キ……ダメ……逃げて……」

サキ「明日菜ちゃん!」

張「まったく、お嬢ちゃんの番はまだだろう?なに舞台に無断で上がってるんだ?」

背後から聞こえる張の声を聞き、反射的に振り向き、背後に明日菜をかばうようにして両の腕を広げるサキ。

張「……なんだ嬢ちゃん。お友達をかばってるのか?」

冷淡な目でサキを見下ろす張。

そんな張に対して、張を睨みつけながらも一歩も飛びこうとしない

気概を発しながらサキ。

サキ（ふたばちゃん居なくなつてから、何の力も無くなつちやつたけど・・・それでも！私は女神だったんだから！ふたばちゃんのように立派にはいなくても・・・せめて、明日菜ちゃん達だけはサキの身に掛けて守ってみせる！！）

サキはかつて自分と一緒に女神^{アテナ}から力を分け与えられた、今はもう居ない一番の友達を思い浮かべた。

戦いの恐怖や辛さに震えながらも、理不尽にさらされ、不運に見舞われた人たちを助けるために、女神として戦い抜いたかつて再会を誓い合つた友達のふたば。

彼女のように立派でなくても、たとえ無様でも、ふたばがしてきたように二人だけは守ってみせる。そう心に強く思いながらサキは自分を見下ろしていた張を睨みつけた。

張「その目・・・気に入らん。まるで・・・俺がこの世界に流れ付くきつかけを作つたあの妙なガキと同じ目・・・本当に気に入らんぞ！！」

そう言つて手刀を振るい、明日菜を庇うサキの肩を切り裂く張。だがサキはその切り裂かれた痛みに声を上げず、眉一つ動かさずに張をにらみ続けた。

張「悲鳴一つどころか、眉一つも動かさんか・・・本当にムカツクな！そんなにその嬢ちゃんが大事なら・・・二人仲良くあの世に逝つてろおおおおおおおつ！！」

張はそう叫ぶと、ありつたけの力を込めた手刀を振り上げ、サキを後ろにいる明日菜諸共切り殺そうと振り下ろす。その時

聖時「真空呪文！」

突如、張の背後から風の刃が襲い掛かり、張は慌ててサキに振り下ろすはずだった薄刃斬光を、自分に迫っていた風の刃にぶつけて相殺してかわした。

張「だ・・・誰だ！！」

サキ「え？あれは・・・」

明日菜「ま、まさか・・・」

風の刃が来た方を見たサキ達は思いがけない人物が立っていた事に驚き、そして再びその人物に出会えた事に喜んだ。

明日菜にとっては、自分を家族の一人だと言ってくれた人との数年ぶりの再会であり、サキにとっては、一番の友達であるふたばと共に再会を花輪と共に約束した人物・・・神谷聖時が気絶した張の取り巻きの男を片手に持つて立って居た。

明日菜「せ・・・聖時？」

サキ「せ・・・聖時さん！」

サキは聖時の顔を見て涙を流しながら嬉しそうに言った。

張「お・・・お前は・・・」

聖時「・・・お前ら一体何なんだ！！俺の大事な友達や家族を痛めつけやがって・・・どうなるか分かってるんだろっな！！」

物凄い怒気を発しながら張達たちを睨みつける聖時。

その怒気のアマリの凄さに、張の取り巻きたちは震え、後ずさる。

取り巻きの男5「な・・・なんだこのガキ・・・あ、足がすくんで動けねえ・・・」

恐怖に震える取り巻きの男たちそんな中、張だけは聖時を見た瞬間から動かずに、ただ聖時を見ているだけだった。

ピラ「あ・・・兄貴、あのガキ、ヤバくないですか？・・・？兄貴？」

ピラと呼ばれてた取り巻きの男は動かない張の顔をのぞき込んだ。

張「・・・フフツ、ハッアハハハハハハッ！！」

ピラ「あ・・・兄貴？」

突然笑い始めた張を見て後ずさるピラ。

張「フフツ、まさかこの世界で会えるとは思ってもみなかった。久しぶりだな・・・1年ちよつとつて所か？」

聖時「？一年ちよつと？お前みたいな奴、知らな・・・」

ピティ「聖時〜！」

知らないと言おうとしたとき、聖時の後ろからピティが飛んできた。

ピティ「やつと追いついたわよ！なにいきなり走り始めるのよ！おかげで私とネギが置いてけぼりになっちゃたじゃない！」

聖時「ピティ、ネギは？」

ピティ「遅いから置いて来ちゃったわよ。それより……これ？
どう言う状況なの？」

ピティは聖時の目の前の状況を見て、その解説を聖時に聞いた。

張「ほう……あの時のチビも来てたのか。」

ピティ「うん？誰がチビよ！って……ああっ！あの時の下位元神
霊！――」

聖時「あの時の？」

ピティ「ほら思い出さない？私とふたばが襲われて、あんたがあいつらをぶっ飛ばしたのを？」

聖時はピティの話を聞いて、今の状況と似た状況があった事を思い出した。それはかつて自分が初めて実戦をした時のこと（真の紋章と竜の騎士、第13（14話）。獅子神黎真配下の下位元神霊との戦い……その下位元神霊の事を思い出しハツとする聖時。そう、今日の前に居る男がその時の下位元神霊だと思い出した。

聖時「……あの時の！な、なんであの時の下位元神霊が第97
b管理外世界に！」

張「なんで・・・だと？てめえのせいだろうがあああああ！警察^{サッ}に捕まったのも！組織から切り捨てられたのも！警察^{サッ}と管理局から逃れるために元の世界を出なきゃならなくなつたのも！みんな、テメエがあの時、邪魔したからなんだぞ！！」

聖時を見て、今まで貯めていた怒りを発散させるかのように怒り狂い叫ぶ張。

そんな張を冷静な精神状態で落ち着いて見る聖時。

聖時「俺のせい？ふん！何が俺のせいだ！自分が今までしてきた事を棚に上げて何言ってる！！自業自得だろう！！」

聖時はそう言つて、目の前の男と男がかつて居た組織のしてきた事を思い出して怒鳴り返した。

張「黙れ！！今すぐこの場でバラバラにしてやる！！」

そう言つた張は手を手刀に構えて手を光らせる。

聖時「やれるものなら殺ってみろ！あの際の俺と同じだと思つたら大間違いだぞ！！」

つづく

第4話 やつと・・・本当に出会えた（前書き）

本当~~~~~に長い間すいません!!

やっと第4話が出来ました。

今回の作品は、今までで一番の難産でした。

では第4話をどうぞ。

第4話 やつと……本当に出会えた

第4話 やつと……本当に出会えた

サキは今、長い間会いたいと強く思い続けた人物がそこに居た。

その人、神谷^{かみやせいじ}聖時は使い魔のピティを従えて自分達を取り囲んでいた悪漢たちに達にはるむことなく、堂々とした態度で対峙していた。

聖時「ピティ、明日菜達の怪我の治療を。」

ピティ「分かった。」

そう返事をしたピティは怪我をして動けなくなった明日菜とサキの傍に飛んで行く。

明日菜「う、うつつうつ……」

ピティ「大丈夫、すぐに治してあげるからね。」

明日菜達の元に飛んできたピティは、明日菜に対して両手をかざして、回復呪文を唱えた。

ピティ「この者の傷を癒したまえ！完全^{ペホマ}回復呪文！」

ピティの両の手から回復呪文の力が明日菜を照らし、怪我を次々と癒していく。

それを見た後、聖時は張とその取り巻き達と対峙する。

聖時「さて、お前ら……一度ならず、二度までも俺の大事な人達を傷つけやがって……ゆるさんぞ!!」

取り巻きの男たち『うっ!!』

取り巻きの男たちは聖時が発せた威圧感に押され、たじろぐ。

張「うろたえるな! 相手は一人だ! それに、今の俺にはアレがあるし、お前らも正体を現せば、どうにかなるだろう。」

取り巻きの男1「そ……そうだったな。」

取り巻きの男2「張の兄貴にはアレがあるし……」

取り巻きの男3「俺たちの本当の姿の力を使えば勝てる!」

聖時に対して一度は怯み、後ずさった取り巻きたちだったが、張の言葉を聞き、再び聖時に対峙した。

聖時「……やれやれ、一度ぶっ飛ばされたのにまだ懲りないのか?」

取り巻きの男「ほざけ! 今度はお前がぶっ倒される番だ!」

取り巻きの男達は一斉に襲いかかる。

聖時「ハァ、まったく、懲りずにまたおそいかかってくるか……
・馬鹿は死ななきゃ治らないって言うけど、どうやら本当みたいだね……」

聖時はそう言いながら、足元に転がっている、先程までに明日菜が使っていた鉄パイプを足で蹴り上げると、それを空中でキャッチして構えた。

聖時「本当に・・・救いようがないね!!」

そう叫ぶと同時に、聖時は手に持っている鉄パイプで、自分に襲いかかる取り巻きの男達に向かって振るった。

聖時が振るった鉄パイプはまるで飛ぶように取り巻きの男達に向かって振るわれ、男たちの攻撃は全てかわされて、一度も聖時を捉えることはなく、あっという間に聖時の剣術「飛天御剣流」の前に倒れた。

聖時「まったく・・・前の俺に敵わなかったのに、あの時からさらに強くなった俺に、敵うわけないだろうに。」

聖時はそう言っ、鉄パイプを肩に担ぎながら、自分が倒した男達を見て言った。

サキ「聖時さんの戦っている姿は初めて見たけど・・・やっぱりすごい。」

明日菜「せ、聖時、何時の間にこんなに強くなったの?」

ピティの治療を受け終えた二人は、聖時の戦いを見て、素直にすごいと思わず口にした。

聖時「さて・・・後はアンタだけだ。素直に負けを認めて、大人しく捕まるか、それとも前みたいに俺にブツ飛ばされて捕まるか・・・さて、どっちにする?」

張「フフフツ．．．．ハッハハハハッ！それでそいつらに勝ったつもりか？」

聖時「？何を言つて．．．！なっ？！こいつ等？！」

先ほど聖時に倒された男たちが、まるで幽鬼のようにゆらりと立ち上がってきた。

聖時「こ、こいつ等どうして立ち上がれるんだ？」

聖時が疑問の声を出した次の瞬間、立ち上がった男たちが、突如唸り声を上げ始めた。

取り巻きの男「「「「ううおおおおおおおっ！！！」」」」

聖時「なっ！」

明日菜「う．．．うそ．．．」

サキ「こ．．．これって？！」

ピティ「ま、魔王軍のモンスター．．．」

取り巻きの男たちは筋肉が膨れ上がり、肌の色が変わり、体系や顔つきまでが人間離れした姿になった。

聖時「鉄球魔人、ボストロール、だいまじんにエリミネーター、ギガンテス．．．．元・鬼人兵団所属のモンスター．．．」

ピティ「な、なんで鬼人兵団所属のモンスターがここに居るの!？」

聖時「おそらく魔王軍に居場所が無くなったんだろう。軍団長、副軍団長の両方が居なくなつて鬼人兵団は事実上壊滅した。連中は魔王軍内での居場所を失つて魔王軍内から炙れてしまい、この世界に流れ着いたつて所みたいだな。」

鉄球魔人「・・・そうだ、わかつてるんじゃないか。」

魔物の一人、両手に鎖鉄球を持った髭面の魔物・鉄球魔人が話し始めた。

鉄球魔人「お前らのせいで鬼人兵団は壊滅、鬼人兵団所属の俺たちは魔王軍に居場所が無くなり他の軍団の連中に後ろ指を差され、今や次元世界にバラバラに散る始末・・・それもこれも、みんなお前らのせいだああああああっ!!!!」

エリミネーター「そうだ!ここで俺たちの恨み!晴らしてやる!!」

聖時「・・・ふゝ、やれやれ・・・・・・・・ピティ!」

ピティ「え?なに?」

聖時「結界を張ってくれ。アルフからミッド式の封鎖結界の張り方教わってるんだろう?頼む!」

ピティ「え?あ・・・うん!ちょっと待って!」

そう言つて結界を張るピティ。

聖時「さて……一度ヤラしても懲りない脳筋バカ共にお仕置きをしてやるのか？」

そう言つて魔物達を睨み付ける聖時。

だいまじん「な！言うに事欠いて脳筋バカだと！！」

ボストロール「脳筋バカ？なんだソレ？」

ギガンテス「バカにされてるんだ？！気が付け！！」

ボストロール「むっ！バカにしてたのか……許さない！」

聖時「……やれやれ、本当に脳筋バカだったみたいだな……」

ボストロール「バカにするなああああああつ！！」

緑色の巨体で右手にこん棒を持った魔物、ボストロールが怒り狂た状態で右手に持ったこん棒を振りかぶり、全力で聖時に振り下ろした。

明日菜「せ、聖時！！」

サキ「あ、あぶない！！」

サキと明日菜はボストロールの一撃が聖時を襲い、二人は聖時がミンチになると思わず目をそむけた。

ドゴッ！

鈍い音が辺りに響くが、その音は明日菜達が予想していた音よりもずっと小さい音だった。

明日菜・サキ「?」

二人はこれに疑問に思い、恐る恐る聖時のいる方へ視線を向けると、そこにはボストロールのこん棒を左手で受け止めている聖時が居た。

ギガンテス「なっ！ボストロールの一撃を・・・」

エリミネーター「片手で防いだ?!」

聖時「おおおおおおおっ!!」

左手で受け止めたこん棒を、持っているボストロールごと持ち上げると、そばに居るエリミネーターに投げつけた。

ブン!

ボストロール「うわあああああっ!」

エリミネーター「うわっ!こっち来るんじゃないやねえええええええ!!
ぐわっ!!!」

飛んできたボストロールの巨体の下敷きになり、哀れ、エリミネーターは息を引き取る。

ギガンテス「おのれえええええええ!!」

だいまじん「くらええええええっ！！」

仲間がやられ、怒り狂った一つ目で一本角を持つ魔物・ギガンテスと髑面の巨体の魔物・だいまじんが二匹がかりで襲いかかる。

ぶん！ぶん！

巨体から生まれる物凄い破壊力の攻撃が聖時に振り下ろされるが、その攻撃は空を切った。

ギガンテス「なっ？！」

だいまじん「あれ？」

聖時がいつの間にか居なくなったり、攻撃が空振りになったので頭に？マークを浮かべる二匹。

張「バカ野郎！上だ！！」

ギガンテス・だいまじん「「！？」」

張の言葉で慌てて上を見る二匹。

そこには攻撃をいつの間にか飛んでかわした聖時がそこに居た。

聖時「はああああああっ！！」

聖時はそのまま動きが止まったままのギガンテスに全力の右ストレートを頭部に打ち込む。

ドゴッ！

ギガンテス「ぐわっ！」

そしてそのまま、すかさずにそばに居るだいまじんの腹部に今度は左ストレートを打ち込む。

ドガッ！

だいまじん「ぐはっ！」

ここまでの行動を一瞬のうちに済ませ、一気に二匹の魔物を始末する聖時。その聖時に対してこんどは鉄球魔人が全力で鎖鉄球を投げつけてきた。

鉄球魔人「やろおおおおお！」

ブンッ！

物凄い勢いで聖時にせまる鎖鉄球。その鎖鉄球に向かって飛び蹴りで迎え撃つ聖時。

聖時「だりやああああああああああっ！！！」

気合が入った聖時の飛び蹴りは鎖鉄球を砕き、そのまま投げた本人である鉄球魔人に突き刺さる。

鉄球魔人「なっ！ぐわあっ！！！」

聖時の蹴りで倒れる鉄球魔人。その鉄球魔人を倒して動きを止めた

聖時に対して、今度は先ほど投げ飛ばされたボストロールが走って襲いかかってきた。

ボストロール「このおおおおおおおおおっ！！」

武器のこん棒を振りかぶって襲いかかるボストロール。

そんなボストロールに対して聖時は空に手をかざした。

聖時「来たれ！聖なる雷！！」

聖時の力で瞬時に雷雲が頭上に現れる。

聖時「ライデiiiiiiiiイン！！！！」

掲げた手をボストロールに振り下ろし、上空の雷雲から雷をボストロールに落とす聖時。

ボストロール「ぐわああああああああっ！！！！」

ライデイン
電撃呪文を受けて、全身を電撃で焼かれたボストロールはブスブス
と黒い煙を上げて地面に倒れた。

明日菜「うそ……あんなにデッカイ化け物をこんな簡単に……
……」

明日菜は自分が知る小さい頃のおとなしい感じで、こう言った荒事
には向いてないイメージをしていた聖時が、ここまで強くなってい
た事に驚き、ただただ呆然と立ちすくんでいた。

聖時「さて……………残りはお前だけだ……………張！」

聖時はそう言いながら残った最後の一人である張を睨み付けた。

張「……………鬼人兵団所属のモンスターの中でもこいつらは上位に当たるモンスターだ。それをこつても簡単に叩きのめすとは、いやはや、強くなったねーだ・け・ど……………」

そう言いながら張は聖時に対して向き直る張

張「俺は……………もつと強いんだよ！！」

そう言った張は体から黒いオーラの様な物を出し始める。

ピティ「なっ！あれは……………闇小宇宙！！」
ダークコスモ

張の体から闇色に染まった邪悪な小宇宙^{コスモ}、闇小宇宙^{ダークコスモ}が立ち上る。

聖時「……………お前それは？」

張「ふふふつ、どうだ、驚いたか？人が己の内に秘める最強の力、小宇宙^{コスモ}！！その力は無限で、極めれば星をも砕き、神々にも届くと言われている力だ！！そして……………」

聖時「！？」

張が手を上にかざして闇小宇宙^{ダークコスモ}の力で何かを呼び寄せる。

ピティ「あれって……………まさか！」

ブラッククロス
聖時「暗黒聖衣！！」

張が手をかざした空間に、黒い金属で出来たオブジェの様な物が現れた。

ブラッククロス
暗黒聖衣、かつてふたばとサキが女神としての力を受け取った世界の戦女神アテナから見放された者たちが好んで身に着けた物が暗黒クロス
聖衣であり、それを身に着けた物達を暗黒聖闘士と呼ぶ。

聖時達は、以前あったインキュベーターや鬼人兵団との戦いの中で、ブラックセイント
暗黒聖闘士の本拠地・デスクイーン島から次元断層に巻き込まれて聖時達の世界に流れ着いた暗黒聖闘士や、同じように流れ着いた暗黒聖衣を身にまとして暗黒聖闘士になった者たちと戦った事があった。

ブラッククロス
張「俺の体を覆え！！ペルセウスの暗黒聖衣よ！！」

ブラッククロス
張の声に反応し、ペルセウス座の暗黒聖衣が張の体を覆う。

ブラックセイント
張「ハッハハハハハアッ！どうだ！暗黒聖闘士となった俺の闇小宇宙は！！」

ブラッククロス
張の体から、暗黒聖衣を身に纏った事により、さらに強力になった闇小宇宙が発せられる。

明日菜「うっ！」

ダークコスモ
張から発せられた闇小宇宙により、小宇宙を感じ取る事が出来ない明日菜でさえも、張からプレッシャーを感じて顔をしかめた。

ピティ「聖時！！」

小宇宙を感じ取る事ができる。ピティは膨れ上がった張の闇小宇宙を感じ取り、聖時に声をかける。

聖時「大丈夫！この程度の小宇宙で俺をどうこうする事は出来なよ。」

張「な、なに！！この程度の小宇宙だと！！」

聖時「ああ。俺に言わせればお前の小宇宙なんて“この程度”だ。」

張「なにいいいいっ！強がってるんじゃないやねええええ！知ってるんだぞ！お前はパートナーを失って、アーティファクトである「龍星座の聖衣を失ったって！聖衣無し状態で、暗黒聖闘士に勝てると思うなあああああああっ！！！！」

張はそう言って膨れ上がった闇小宇宙で攻撃を仕掛けてきた。

張「くらえ！暗黒斬光！！」

闇宇宙により聖闘士の技まで昇華した張の必殺技。

以前は白い光で出来た帯状のしなる鞭のような刃だった。それが闇宇宙の力で黒い光に変化して聖時に襲いかかってくる。

その威力、速度共、元となった白刃斬光よりも上であった。

張「はっはははははっ！そのまま解体してやるっっっっっっっ！！！！」

明日菜「あ、あぶない!!」

張の暗黒斬光が聖時に迫り、今度こそダメだと明日菜は思った。だが張の暗黒斬光が聖時に当たると思った瞬間、またしても聖時の姿がその場から消え、張の暗黒斬光は空を切った。

張「な、何?!ど、どこだ!どこ行つた!!」

張は消えた聖時を見て驚き、辺りをキョロキョロと見渡しせ聖時を探した。

聖時「ここだ!!」

突如聞こえてきた聖時の声は、張の後ろから聞こえてきた。

張「な!?!後ろ?!」

張は慌ててその場から飛び退きながら、聖時を正面に捉えるようにする。

張「か、かわしたと言うのか!?!この俺の暗黒斬光を?!」

聖時「おまえの暗黒斬光は、以前俺と戦った時に使った白刃斬光を昇華させた技。威力や速度は変わっても、技の概要は同じ……
セント
聖闘士に同じ技は通じない!!」

張「く、くっ!!」

張は己の技が見切られて焦り、後ずさる。

聖時「あの程度の速さと力で小宇宙コスモを語るな！！お前のくだらに自尊心や快樂の為に死んで行った者達そして！」

聖時の額に竜を模した紋章が浮かび上がり、聖時の体から聖なる小宇宙コスモ、聖小宇宙セントコスモが発せられる。

聖時「お前に傷つけられた木乃香や明日菜、サキの為に――――
――この俺がお前に与えてやる！！」

張「な・・・なんだ？！奴の小宇宙コスモが形を取る・・・あ、あれは！」

明日菜「ド、ドラゴン・・・」

聖時の聖小宇宙セントコスモは聖時の守護星座・ドラゴンを形作り、聖時の背後に浮かび上がる。

聖時「絶望という名の断罪を！！」

聖時の体から燃え上がる聖小宇宙セントコスモは徐々に膨れ上がり、張を圧倒する。

張「うつつうつつ！！こ、こんな小僧に・・・なめられてたまるかあああああつ！！！」

張は聖時に対してやぶれかぶれで小宇宙コスモが乗った右ストレートを放とうとする。

聖時「なめてるのはどっちだ？」

張「なっ！モーション中の拳を撃ち落とした！？」

聖時は張の右ストレートをモーション中に近寄って叩き落とした。

張「な、なんてスピードしてやがるんだ……」

張は近寄った聖時から距離を取るために後ずさりをする。

聖時「張……お前の力には深さが無い……お前の小宇宙
は上辺だけの物……」

聖時の小宇宙^{コスモ}がさらに膨れ上がり、右手に集う。

聖時「お前に見せてやる……全ての力の源となる魂の世界……
……真の小宇宙^{コスモ}の力を……」

張「う、うおおおおおっ……」

聖時「龍の咆哮……その身に受ける……」

聖時右手に集まった小宇宙^{コスモ}龍の形を取る……

聖時「廬山昇龍覇……」

張「なっ！ぐわああああああっ……」

聖時の右腕から放たれた龍は張の暗黒聖衣を砕いて吹き飛ばした。
^{ブラッククロス}

ドガッ！

吹き飛ばされた張はそのまま地面に激突し倒れた。

聖時「汝に聖セント小宇宙の導きが・・・・・・・・有らん事を・・・・・・・・」

聖時はそう言つて倒れた張に背を向けて、倒れている木乃香やそのそばに居る明日菜、サキ、三人を治療しているピティに近寄つた。

聖時「・・・・・・・・大丈夫だった？」

サキ「あ、ああ・・・・・・・・」

サキは聖時の姿を見て、言葉にできない何かが浮かび上がって涙を流し始めた。

アテナから同じ使命を受け・・・・・・・・

力を分け与えられ・・・・・・・・

同じ使命を与えられ・・・・・・・・

時に助け合い・・・・・・・・

支え合つた自分の一番の友で有り・・・・・・・・

パートナーであつた子・・・・・・・・渡良瀬ふたばがかつて愛した男性ひと・
・

そして同じように自分もそう思い、再会をふたばと共に約束をした
男性ひと・・・・・・・・神谷聖時。

いつも夢か精神体でしか会えなかった神谷聖時が今、目の前に居ることに対し、今は亡き一番の親友から託された思いと、やっと出会えた思いで胸がいっぱいになったサキは涙が自然とあふれ出してきた。

聖時「あ、あれ？サキ？！どうし「聖時さああああん！！」わっ！！」

急に涙を流し始めたサキを見て驚く聖時に対して突然抱き着くサキ。

聖時「さ、サキ？！／／／／」

突然抱き着かれ、顔を赤くする聖時。

サキ「夢でも幻でもない．．．．．本当の．．．実態のある聖時さんだ．．．．聖時さんの温もりだ．．．．」

涙を流し抱き着くサキ。

そんなサキを見て聖時は少し驚いた顔をするが、すぐに微笑みを帯びた顔をして抱き着いたサキを抱きしめ返した。

聖時「．．．．ああ、夢で幻でも、精神体でも無い、ちゃんと実体も温もりもある．．．．本物の俺だよ．．．．」

サキ「グスツ．．．．うん．．．．ふたばちゃん。」

サキは聖時に抱き着きながら、自分の右腕に身に着けている花輪を見た。

その花輪はかつて聖時とサキ、そして今は亡きふたばの三人で再会を約束して編んだ代物だった。

聖時「…………ふたば。」

聖時もほぼ同じようにして自分の右手の花輪を見て、約束を思い出していた。

もう完全に約束を守ることは出来ないが…………

それでも…………

半分でも守れるなら…………

守ろう…………果たそう…………

彼女の分まで…………

そう願ひ、今日まで頑張ってきた二人は…………

今は亡き…………心優しき少女の分も含めて…………

二人「やっと…………本当に出会えた。」

今日、本当に出会えたのだった。

《つづく》

第4話 やつと・・・本当に出会えた(後書き)

もう一つの作品の方を中心にしていくので、こちらの作品は更新が
亀更新の上に不定期になりがちですが、どうぞこれからもよろしく
お願いします。

ではみなさん！良いお年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339r/>

魔法先生リリカルネギま！～光輝の勇者と塔から来た少女～

2011年12月30日22時51分発行